



根本順吉 著

渦・雲・人

—藤原咲平伝—

筑摩書房，1985年2月刊，B6判，
296頁，定価1800円

故人の伝記を書くのは難しい。とくに遺族や縁故者は故人の欠点や裏の部分を書かれるのをいやがる。しかしある程度裏の部分を書かなければ、故人の表の部分は浮き上がってこない。足軽で猿に似ていたことを書かなければ秀吉の像は浮んでこない。

私は著者の、藤原咲平伝を読むにあたって、その裏の部分はどう処理するのかを注意して読んだ。

著者は、裏の部分ばかりでなく、表の部分も、なるべく著者の主観を交えないで、資料に拠って客観的に書くことに努めている。そして、藤原咲平のレリーフに彫りの深さを与えることに成功している。読者は的確に配列された資料を読んでいる中に、その時代時代の藤原咲平の姿を、鮮明に把握することができる。それに各時代の藤原咲平の写真が豊富に挿入されていることもこれを助けている。当時の事跡を読み、先生のそのころの写真を眺めていると、先生が動きだすような想いかられるのは、私だけではあるまい。

また著者は資料のない「うわさ」はカットしている。それは著者の歴史は客観的な資料の上のみ礎かれるとの理念によるもので、その点この本は、藤原咲平の「正しい」歴史である。

私もこの本によって、藤原先生のごことで随分思い違いをしていたことを正された。例えば、先生は参議員議員立候補のあいさつにきた友人をみて、「あいつが参議員に立つなら、オレも」と思い、一夜に立候補を決意され

たと聞いていたが、先生はかなり前から立候補の意志があったことが、資料で明確にわかる。敗戦の祖国を救おうとする先生の熱意の延長上に「立候補」という意志が前からあった方が、当然といえよう。

内容は藤原先生の一生を年代を追って、そのときどきの主なことがらをテーマにして29章にわたって記述されている。藤原先生がその一生を通じて、どれだけ真摯(しんし)に生き、立派な科学者であるとともに、非常な愛国者であったことがわかる。先生は不幸にして、太平洋戦争の時に五代中央気象台長となられ、敗戦に追いこまれていく過程の中で、辛酸をなめられた。しかし先生は病弱な体に鞭うって、その艱難に一步も退くことなく立ち向かわれた。不幸にして戦は敗れたが、先生は敗戦の野にさまよっていた気象関係者をすべて収容された。私はこの伝記の中で戦中戦後の先生に、立派な科学者以上に、偉大な人間としての藤原咲平をみるのである。

先生の晩年は、追放されたものとして、みじめであった。しかし自らの信念に生きた先生は、案外さばさばしておられたように思う。

藤原先生に関する本は、いままでもいく冊かである。しかし新たな豊富な資料をえて、ここに本格的な藤原咲平伝が著わされたことを嬉しく思う。そしてこの伝記が、気象関係者ばかりでなく、広く一般の人びとに読まれることを切望する。この本は、科学者の生き方の指針となるばかりでなく、人生を真摯に生きた人の姿が、強く心をうつからである。

著者は先生の教え子であるとともに、気象学にも気象学史にもくわしい。しかも気象百年史をも手がけた著者は、もっともこの伝記を書くのにふさわしい人である。私は藤原先生のために、その伝記の著者として最適の人をえたことを喜びたい。
(安藤隆夫)